『中国地区英語教育学会研究紀要』No.18 (1988.9.1)

日本人英語学習者のNon-native English聴解力と他の英語能力との関係[1)]

松山商科大学　波多野　五　三

I．研究の目的

国際共通語としての英語（English as an International Language, 以下EILと略す）に関する一連の研究は，英語使用の主体は英語の母国語話者（以下NSと略す）ばかりでなく，英語の非母国語話者（以下NNSと略す）でもあるという観点から，英語を媒介とした言語相互作用を分析しようとするものである。そこで，本稿は，日本人英語学習者を対象としたEIL研究の方向性を探るとともに，数種の部分的テスト（聴解テスト，文法テスト，語彙テスト）の結果から，日本人英語学習者のnon－native English（以下NNEと略す）聴解の特性を考察することを目的とする。

II．EILの定義と研究領域の細分化

NNSによる英語運用の音韻的，語彙的，文法的な特徴が土着化（'nativazation'）するにつれて，EILの特質とその普遍性が様々な角度から検討されるようになった。Baxter (1983: 104) が，"EIL refers to functions of English, not to any given form of the language" と規定しているように，EILはBasic EnglishやEsperantoなど特殊な言語体系のことを意味するものではない。すなわち，EILとは，英語を媒介とした言語相互作用 (language interaction) における意味交渉そのものを意味しているのである。

言語相互作用は，言語交渉者 (language interactors) の目標言語学習過程，行動目標，目標文化など種々の要因によって構成される。しかし，EILの媒介であるNNEとは究極的にはidiosyncratic dialectであり，native English（以下NEと略す）に比較して体系性に欠けるという論拠から，科学的な研究の対象外とみなされる傾向が強いことは否定できない〔Kachru 1986: 104〕。とりわけ，NNEの明瞭性 (intelligibility) に関しては，その構成要因があまりにも複雑に関連し合っており，客観的な尺度による規定は困難を極める。加えて，明瞭性の判断基準としてNEが行動目標と考えられる場合は，NNEのNE規範に対する近似性の記述に主眼が置かれる。しかし，NNS－NNS言語相互作用における意味交渉という点においては，NEの規範的意味合は稀薄にならざるをえない。

Smith (1983: 14－15) は，英語を媒介とした言語相互作用を以下の4種類に類型化している。

(1) L 1 ⟷ L 1 (international)
(2) L 2 ⟷ L 1
(3) L 2 ⟷ L 2 (international)
(4) L 2 ⟷ L 2 (intranational)

さらに，Smith and Nelson (1985: 333－334) は，これらの言語相互作用すべてに関して，EILの主要な構成要因であるintelligibilityを研究対象とすべきであると指摘し，発話の明解度を以下の3要素に細分化している。

(1) *intelligibility*: word/utterance recognition
(2) *comprehensibility*: word/utterance meaning (locutionary force)

(3) *interpretability*: meaning behind word/utterance (illocutionary force)

まず，intelligibility（明瞭性）は，発話の音韻的，文法的な表層上の明解さについての度合いである。次に，comprehensibility（理解性）は，発話の意味・内容の明白さ，すなわち，発話行為の効力についての度合いを意味する。最後に，interpretability（解釈性）は，発話の含蓄や機能を解釈する際の容易さ，すなわち発話内行為の効力についての度合いである。

発話の明解度を決定する諸要因[2]は，情報発信者と情報受信者の間で交される意味交渉の性質によって特徴付けられる。従って，明解度に関する限り，NNS－NNS 言語相互作用（L 2 ⟷ L 2）は，NS を包含した場合の言語相互作用（L 2 ⟷ L 1）に比較して，固有の性質を有していると推定される。たとえば，Varonis and Gass (1985)は NNS－NNS 言語相互作用における non－understanding routines[3] の出現回数は，NS－NS 言語相互作用や NS－NNS 言語相互作用よりも多いことを究明し，母国語の異なる情報発信者と情報受信者の間に有意な英語能力差がある場合，意味交渉の必要性が高まると同時に使用言語の簡略化が進み，その結果，'shared incompetence' が双方の第 2 言語習得を促進しうると仮定している。

上述の実験結果が示すとおり，NNS－NNS 言語相互作用には固有の要因が介在すると推定される。しかし，NNS－NNS 言語相互作用に関する研究方法は体系性に乏しく，研究対象項目並びに研究方略も充分確立されていないのが現状である。Kachru (1985: 230) は，下記のように，EIL に関する研究アプローチを基礎研究と応用研究の 2 領域に大別している。

〔基礎研究〕

① 言語交渉者の役割や言語機能などの観点からの EIL の記述

② intelligibility と interpretability の構成要因の解明

③ 妥当性の高い仮説と研究方略の開発

〔応用研究〕

① EIL を考慮に入れた教授体系と指導方法の開発

② カリキュラム，教材，テストの開発

また，Smith and Nelson(1985: 335－336) は，発話の明解度（intelligibility, comprehensibility, interpretability）に関する研究課題を以下の10項目に概括している。

(1) How is the proficiency in English of the *speaker* correlated to the intelligibility, comprehensibility and interpretability of his/her speech?

(2) How is the proficiency in English of the *listener* correlated to his/her ability to comprehend, interpret and find intelligible what he/she hears?

(3) How does topic difficulty for the speaker correlate to the intelligibility, comprehensibility and interpretability of his/her speech?

(4) How does topic difficulty for the listener correlate to his/her ability to comprehend, interpret and find intelligible what he/she hears?

(5) How does the communicative setting (quiet living room vs noisy bar, for example) affect intelligibility, comprehensibility and interpretability?

(6) More research is needed on the effects of familiarity, either with the individual speaker or with the variety of the language being spoken, on intelligibility, comprehensibility and interpretability.

(7) Future research should investigate the correlation of speaker and listener effort to communicative success.

(8) More research is needed on the effects of listener and speaker attitudes toward different

varieties of spoken English on the intelligibility, comprehensibility and interpretability of those varieties.

(9) Intelligibility, comprehensibility and interpretability studies should be undertaken with non−native speakers listening to other non−native speakers who come from different countries.

(10) Studies should be undertaken to determine how intelligible, comprehensible and interpretable native speakers are to non−native speakers, as well as to other native speakers of different national varieties of English.

(1), (2), (4), (6)に関しては, Smith and Bisazza (1982), Gass and Varonis (1984), Conrad (1985), Long (1985) などの先行研究がある。しかし，これらの研究の大半は，NS を情報受信者とした場合の実験報告であり，NNS−NNS 言語相互作用の特質を究明するという点においては普遍性に欠ける。これに対し，(9)は発話の明解度を NNS−NNS というコンテクストで分析することの必要性を唱えたものである。

以下，本研究の実験においては，日本人英語学習者を NNS−NNS 言語相互作用の情報受信者とし，聴解対象となる NNE がタイ人による英語である場合，NE の聴解に比較してどのような差異が生じるかを調査する。

III. 実験 A

1. 目的

聴解の対象となる英語変種の差異（NNE←→NE）の音韻的特徴は，NNS の聴解度に有意差を生じさせる要因となりうるか否かを検証する。

2. 方法

<測定形式>

(1) 聴解テスト

本実験には，Oxford Placement Test, Part A（以下，OPT−A と略す）と Comprehensive English Language Test, FORM A SECTION 1（以下，CELT−A1 と略す）の 2 種類の標準英語能力テストを使用した。前者は，音声で与えられた英文のスクリプトに相当するものを，問題用紙に印刷された語句レベルの選択肢の中から 1 つ選ぶ多肢選択式客観テスト（問題数は 100項目。PART B〔文法テスト〕との併存的妥当性は.89*）である。後者は，①簡単な質問文の答えを選択する問題（PART 1 20 項目），②単文と同意あるいは言い換え表現として適切な文を選択する問題（PART 2 20 項目），③短い対話文の内容に関する質問文の答えを選択する問題（PART 3 10 項目）の 3 部から構成された多肢選択式客観テスト（他の下位テストも含めた CELT 全体の信頼度係数は.98，標準誤差は 7.05）である。本実験においては，CELT−A1 のオリジナルである NS Version（以下 NSV と略す）に加えて，NNS（L 1 はタイ語[4)]）による CELT−A1 スクリプトの朗読を録音し作成した NNS Version（以下 NNSV と略す）を実験群用に使用した。NSV と NNSV の各パートの発話速度（ポーズを除いた発話時間から算出）は表 1 に示すとおりである。

表1　CELT−A1　NSV / NNSV の発話速度

CELT−A　SECTION 1	PART 1	PART 2	PART 3
WORDS	180	247	444
NSV　DURATION	1:03	1:30	2:42
NNSV　DURATION	1:01	1:35	2:48
NSV　RATE(WPM)	171.4	164.7	164.4
NNSV　RATE(WPM)	177.1	156.0	158.6

(2)　評定尺度

「発音の明瞭度」と「全体としての聴き取り易さ」の2要因に関して，それぞれ，5（とても明瞭である）←→1（とても不明瞭である），5（とても聴き取りにくい）←→1（とても聴き取り易い）の5段階尺度を設け，NSV ならびに NNSV 解答直後に回答させた。

<実施時期>

昭和62年1月

<被験者>

統制群（NSVG）は松山商科大学経済学部2年生24名，実験群（NNSVG）は同大学経営学部2年生21名，人文学部2年生5名の計26名である。表2に示した通り，両群は OPT−A の平均値において有意差がないことから，NE の聴解に関しては同等の聴解力を有するものと推定される。

表2　OPT−A の平均値と標準偏差

	n	max	mean	s
NSVG	24	100	69.38	8.68
NNSVG	26	100	69.96	5.27
t = .29, df=48, ns.				

3．結果

t 検定による分析結果は以下に示すとおりである。

表3　発音の明瞭度

	n	mean	s
NSVG	22	3.18	1.23
NNSVG	25	1.8	.63
t =4.82, df=45, p <.0005			

表4　聴き取り易さ

	n	mean	s
NSVG	22	3.55	.78
NNSVG	25	4.60	.49
t =5.49, df=45, p <.0005			

表5　CELT－A1　NSV / NNSV の平均値と標準偏差

	n	max	mean	s
NSVG	22	100	44.00	11.95
NNSVG	25	100	35.84	5.96
t =2.949, df=45, p <.01				

4．考察

表3～表5に示したとおり，発音の明瞭度に対する感じ方（t =4.82, df=45, p <.0005），全体としての聴き取り易さ（t =5.49, df=45, p <.0005），CELT－A1　NSV / NNSV の平均値（t =2.949, df=45, p <.01）の3要因に関して，統制群（NSVG）と実験群（NNSVG）の間にそれぞれ有意差が観察された。表2で明らかなように，NE の聴解においては，両群間に有意差は確認されなかった。しかし，CELT－A1　NSV / NNSV においては，統制群が実験群よりも高得点であり，統制群の NSV English に対する感じ方は実験群の NNSV English に対する感じ方と異っている。すなわち，実験群は OPT－A においては統制群と同レベルの聴解度を示しているにもかかわらず CELT－A1　NNSV では得点が低く，NNSV English（Thai English）を発音が不明瞭で聴き取りにくいと感知しているのである。

CELT－A1　NNSV は，NNS が CELT－A1　NSV のスクリプトをオリジナル録音とほぼ同じ発話速度で朗読・作成しており，CELT－A1　NSV と等価性の高い NNE 聴解テストである。しかしながら，CELT－A1　NSV が各パートを複数のスピーカーによって録音しているのに対し，CELT－A1　NNSV は単一のスピーカーによる録音なので，PART 3 に関しては，発話者の turn－taking という discourse markers の欠如が聴解を困難にしたという可能性は否定できない。

Ⅳ．実験 B

1．目的

部分的測定の見地から，日本人英語学習者による NNE 聴解力と他の英語能力との関係を数量化する。

2．方法

＜測定形式＞

本実験には，実験Aで用いた CELT－A1　NNSV に加えて，CELT, FORM B の各下位テスト（以下，CELT－B1, CELT－B2, CELT－B3 と略す）と JACET Listening Comprehension Test, FORM A（以下，JACET－A と略す）を使用した。CELT－B1 は前述の CELT－A1 と同一形式の聴解テストである。CELT－B2 は動詞句や語順などに関する空所補充形式の多肢選択式文法テスト（75項目）である。CELT－B3 は，①内容語に関する空所補充形式問題（35項目）と②同意語に関する問題（40項目）から成る多肢選択式語彙テストである。JACET－A は CELT－A1 や CELT－B1 とほぼ同じ形式の多肢選択式聴解テスト（問題数は50項目。信頼度係数は.837，標準誤差は11.59）である。

＜実施時期＞

昭和62年6～7月

＜被験者＞

松山商科大学経済学部1年生21名，経営学部1年生12名，人文学部1年生7名の計40名（本実験の被験者と実験Aの被験者は異なる）。

3．結果

各テストの平均値と標準偏差，ならびに各テスト間の相関係数は以下に示すとおりである。

表6　各テストの平均値と標準偏差

	n	max	mean	s
CELT−A1　NNSV	40	100	37.98	6.08
CELT−B1　NSV	40	100	38.10	7.32
CELT−B2	40	100	54.18	8.15
CELT−B3	40	100	42.80	7.30
CELT−B TOTAL	40	300	135.08	15.93
JACET−A	40	120	30.13	18.11

表7　各テスト間の相関係数

TEST	1	2	3	4	5	6
1　CELT−A1　NNSV	1.000	.144	.148	−.043	.122	.250
2　CELT−B1　NSV		1.000	.328a	.395a	.809b	.368a
3　CELT−B2			1.000	−.010	.658b	.065
4　CELT−B3				1.000	.635b	.301
5　CELT−B　TOTAL					1.000	.340a
6　JACET−A						1.000

a＝p＜.05
b＝p＜.001

4．考察

表6より，CELT−A1　NNSVとCELT−B1　NSVの平均値間に有意差がない（t＝.082，df＝78，ns.）ことが判明した。

表7より，(1)CELT−A1　NNSVとCELT−B1（r＝.144），CELT−A1　NNSVとCELT−B2（r＝.148），CELT−A1　NNSVとCELT−B3（r＝−.043），CELT−A1　NNSVとCELT−B　TOTAL（r＝.122）の間にそれぞれほとんど相関関係がないこと，(2)CELT−A1　NNSVとJACET−Aの間に低い相関関係（r＝.250）があること，そして，(3)CELT−B1とCELT−B2（r＝.328），CELT−B1とCELT−B3（r＝.395），CELT−B1とJACET−A（r＝.368）の間にそれぞれ低い相関関係があることの3点が判明した。また，CELT−B1とCELT−B TOTALの間に高い相関関係（r＝.809）があることも観察された。

本実験においては，単一の学習者群がCELT−A1　NNSVとCELT−B1　NSVの2種類の聴解テストを受験しているので，本実験と実験Aの結果を同等に扱うのはあまり妥当とは言えない。しかし，両実験の被験者群の英語能力の差異が，NNE聴解過程になんらかの影響を及ぼしている可能性は否定できない。

また，本実験においてはNNSVとNSVの平均値間に有意差がないにもかかわらず，NNE聴解度はNE聴解度をはじめ文法テストや語彙テストなど他の下位テストとの内部相関関係がないのに対し，NE聴解度は他の下位テストとの間に低い相関関係があることが判明した。

V. 結語

本研究は，NNS－NNS 言語相互作用におけるＬ２としての英語の明解度を構成する諸要因を，NNS である情報受信者の NNE 聴解力と他の英語能力との関係という観点から分析しようとするものである。

そこで，日本人英語学習者を対象とした２種類の実験から，以下２つのことが判明した。

第１点は，学習者が聴き取り易く発音が明瞭であると感知した NE の聴解度は，聴き取りにくく発音が不明瞭であると感知した NNE の聴解度よりも高いことである。この結果から，聴解の対象となる英語に対する学習者の聴取パターンは，その聴解の正確さの度合いに影響を与える要因となりうるものと推定できる。

第２点は，NNE 聴解度と NE 聴解度の間に有意差がみられない学習者群に関して，NNE 聴解力は文法力や語彙力などと相関関係がほとんどないのに対し，NE 聴解力は文法力と語彙力の双方と低い相関関係があることである。これは，NNE 聴解力が他の英語能力と統合的な言語能力としては習得されていないことを示す有力な証拠であると同時に，NE 聴解力は NNE 聴解力を予測する上であまり妥当性の高い指標としては機能しないことを示唆するものである。従って，NNE 聴解過程は固有の要因を包含している可能性が高く，NE 聴解の転移という観点から多面的に分析される必要がある。換言すれば，NE 聴取は NNE 聴解の伸長を促進する要因となりうるか否かを検証する必要性が生じるのである。すなわち，インプットとしての NE は NNE 聴解力の習得を助長する（NE のプラスの転移）か，あるいは，modified input としての NNE の聴取は NE 聴解力の強化をもたらす（NNE のプラスの転移）か，さらに，NNE の聴取は NE 聴解技能の習得を阻害する（NNE のマイナスの転移）要因となりうるか否かといった，NNE 聴取の予測的転移性を解明する必要があるのである。これは同時に，NNS－NNS 言語相互作用における聴解技能の特異性を究明することでもあり，EIL という言語現象を分析する上で不可欠の研究課題となろう。

注

1) 本稿は，昭和62年10月３日に広島大学で開催された第18回中国地区英語教育学会研究発表会での口頭発表論文に，一部修正・加筆を施したものである。

2) Varonis and Gass (1982: 132) は，comprehensibility の構成要因を言語的要因と社会的要因に大別し，その関係を次のように公式化している。

$C = p_{\alpha} + g_{\beta} + f1_{\gamma} + f2_{\delta} + f3_{\varepsilon} \ldots fl_{\zeta} + s_{\eta} \ldots$

C = comprehensibility; p = pronunciation; g = grammar; f1 = familiarity with topic; f2 = familiarity with person; f3 = familiarity with speaker's native language; fl = fluency; s = social factors

3) Varonis and Gass (1985) は，NNS－NNS discourse において，言語交渉者が相手の発話の意味内容の不明瞭な箇所を確認・修正するモデルを示し，そうした意味交渉における言語交渉者間の相互のやりとりを non－understanding routines (pushdown routines) と定義している。

4) CELT－A1 NNSV の作成にあたってはタイ人留学生（20代，女性）に録音を依頼した。氏

は，チュラロンコン大学卒の英語教師で，母国では工科系高等専門学校で英語教育に従事しており，氏の英語は教養あるタイ人の標準的な英語発音であると判断できる。

引用・参考文献

Baxter, J. (1983) "Interactive Listening," in Smith, L. E. (1983: 103−110).

Conrad, L. (1985) "Semantic Versus Syntactic Cues in Listening Comprehension," *Studies in Second Language Acquisition*, 7, 1, 59−72.

Eisenstein, M. (1983) "Native Reactions to Non−Native Speech: A Review of Empirical Research," *Studies in Second Language Acquisition*, 5, 2, 160−176.

Gass, M. S. and E. M. Varonis (1984) "The Effect of Familiarity on the Comprehensibility of Nonnative Speech," *Language Learning*, 34, 1, 65−89.

_____, and C. G. Madden (eds.) (1985) *Input in Second Language Acquisition*. Newbury House Publishers, Inc.

Kachru, B. B. (1985) "Standards, codification and sociolinguistic realism: the English language in the outer circle," in Quirk R., and H. G. Widdowson (eds.) (1985: 11−30).

_____ (1986) *The Alchemy of English*. Pergamon Press.

Kachru, Y. (1985) "Discourse analysis, non−native Englishes and second language acquisition research," *World Englishes*, 4, 2, 223−232.

Long, M. H. (1985) "Input and Second Language Acquisition Theory," in Gass, M. S., and C. G. Madden (eds.) (1985: 377−393).

Nelson, C. L. (1985) "My language, your culture: whose communicative competence?" *World Englishes*, 4, 2, 243−250.

Quirk, R., and H. G. Widdowson (eds.) (1985) *English in the World*. Cambridge University Press.

Smith, L. E. and J. A. Bisazza (1982) "The Comprehensibility of Three Varieties of English for College Students in Seven Countries," *Language Learning*, 32, 2, 259−269.

_____ (ed.) (1983) *Readings in English as an International Language*. Pergamon Press.

_____, and C. L. Nelson (1985) "International intelligibility of English: directions and resources," *World Englishes*, 4, 3, 333−342.

Varonis, E. M., and S. Gass (1982) "The Comprehensibility of Non−Native Speech," *Studies in Second Language Acquisition*, 4, 2, 114−136.

_____ (1985) "Non−native/Non−native Conversations: A Model for Negotiation of Meaning," *Applied Linguistics*, 6, 1, 71−90.